

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



21

よろこびの知らせ
第21集

目 次

あなたの家族も	1
使徒 16:28-34	
まことの神	9
使徒 17:22-27	
恐れなくて	18
使徒 18:9-11	
使徒たちの伝えたもの	27
使徒 20:17-21	

ここに収められたメッセージは、2021年6月にテキサス州
プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたも
のです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

あなたの家族も

使徒 16:28-34

16:28 そこでパウロは大声で、「自害してはいけない。私たちはみなここにいる。」と叫んだ。

16:29 看守はあかりを取り、駆け込んで来て、パウロとシラスとの前に震えながらひれ伏した。

16:30 そして、ふたりを外に連れ出して「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」と言った。

16:31 ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言った。

16:32 そして、彼とその家の者全部に主のことばを語った。

16:33 看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、その打ち傷を洗った。そして、そのあとですぐ、彼とその家の者全部がバプテスマを受けた。

16:34 それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ。

一、ピリピの町で

きょうの箇所には、ピリピの町の牢獄の看守とその家族が救われたことが書かれています。この素晴らしい出来事を学ぶ前に、ここに至るまでのことを振り返っておきましょう。

パウロの二回目の伝道旅行は、アンテオケから出発して、一回目に伝道したデルベやルステラの町々を再び訪ねました。ルステラは、パウロがそこで石打ちにされ、人々が死んだかと思ったほどの目に遭ったところです。人間的に考えれば、誰しも、そんなところには二度と行きたくないものです。けれども、最初の伝道旅行の後、そこには教会ができており、パウロはそれらの教会を励ますためにそこを訪れました。パウロはこの町で青年テモテと

出会い、彼を伝道旅行の一行に加えました（1-3節）。

この地方は「ガラテヤ」と呼ばれていましたが、パウロのガラテヤ地方での伝道は実を結びました。5節に「こうして諸教会は、その信仰を強められ、日ごとに人数を増して行った」とある通りです。それで、パウロは「アジア」と呼ばれる地域に進もうとしたのですが、この時は、聖霊によって禁じられ、道が開かれませんでした（6-7節）。それで、パウロの一行は西に進み、トロアスまでやってきました（8節）。トロアスはエーゲ海に面した町で、このエーゲ海はアジアとヨーロッパの境界、分岐点でした。トロアスの対岸はギリシャ半島で、その北部はマケドニアでした。パウロはトロアスで、ひとりのマケドニア人が「マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください」と懇願している幻を見ました（9節）。アジアからエーゲ海を渡ってヨーロッパに行くというのは、パウロの最初の計画にはなかったことでした。しかし、神は、パウロを今までとは文化も習慣も異なる新しい地へと導かれたのです。アジアで道が開かれなかったのは、ヨーロッパに導かれるためだったのです。どこかのドアを閉ざされたからといって、それですべての道が塞がれたわけではありません。神は、神に信頼し、その導きを求める者に必ず進む道を開いてくださいます。

実際、ピリピの町には、パウロを待っていた人々がいました。そのひとりがルデヤを始めとした神を敬う女性たちでした。パウロの一行は、ルデヤの家に滞在し、ピリピで伝道し、そこにヨーロッパで最初の教会が生まれました（11-15節）。この後、パウロとピリピの教会は固いきずなで結ばれます。そのことはピリピ人への手紙に詳しく書かれています。

二、獄中の賛美

あるとき、パウロとシラスがピリピで伝道していると、悪霊によって占いをしていた女奴隷がふたりの伝道を妨げました。それでパウロはこの人から悪霊を追い出しました。すると彼女は占いができなくなりました。このことは、「占い」が悪霊の働きであり、危険なものであることを教えてくれます。新聞や雑誌には、必ずといってよいほど、星占いなどの記事が載っています。「神を信じるなどというのは非科学的だ」といって信仰に反対する、いわゆる「進歩的」と言われるメディアが、そういうものを堂々と載せています。矛盾したことなのですが、誰もそれに気付いていません。私たちの人生を導いてくださるのは、私たちを愛してくださる神であって、運命ではありません。私たちの人生の導きは、この愛の神のみこころを知ることによって得られるのであって、占いによってではありません。占いは、人の将来を明らかにすることも、それを変えることもできません。かえって、人を恐れに縛りつけるだけなのです。

占いをしていた女奴隷の主人は、彼女に占いをさせて金儲けをしていましたが、それができなくなったので、パウロとシラスを訴えました。二人は鞭で打たれ、牢に入れられ、鎖につながれました（16-24節）。鞭打たれた背中がうずきました。しかし、その痛みは感謝と喜びに変わりました。主イエスが鞭打たれたその苦しみに与ることができたことを、二人は感謝し、喜んだのです。そして、その感謝と喜びは賛美となりました。

なんと強い信仰でしょう。私は苦しいことやつらいことがあると、つい、つぶやいてしまいます。このような箇所を読むと、自分の信仰の足らなさを感じ、恥ずかしくなります。しかし、そん

なときでも、賛美を歌いはじめると、再び信仰を取り戻すことができます。賛美は信仰から生まれるものなのですが、同時に、賛美は信仰を励ましてくれます。自分を励ますだけではありません。他の人に神の愛と恵みを伝えることもできるのです。パウロとシラスの歌声は牢獄に響きました。25節には「ほかの囚人たちも聞き入っていた」とあります。

この後、地震が起こり、囚人たちを繋いでいた鎖が解けるのですが、鎖が解けたからといって、囚人たちは誰ひとり逃げませんでした。それは、囚人たちが賛美を通して、偉大な神に心を捉えられていたからだと思います。また、そのとき起こった地震も、たんなる自然現象ではなく、神がパウロとシラスを救うために起こしてくださったもので、賛美によって引き起こされたと言っても良いと思います。信仰の賛美は、私たちの心を慰め、他の人の心を励まし、また、神のお心に訴え、神の救いを引き寄せるのです。

うれしいとき、楽しいときに鼻歌を歌うのは誰にでもできます。しかし、苦しみの時に祈り、賛美を歌うのは、信じる者にしかできません。私たちが神を信じるのは、神が私たちによくしてくださるからだけではありません。もし、それだけなら、「ご利益信仰」になります。神を、私たちの願望を成就させるための道具や手段にしてしまうのです。神は、いつ、どんなときでも、主なる神です。私たちの人生の目的は、ウェストミンスター小教理問答が言うように、「神の栄光を現し、神を喜ぶ」ことにあるのです。神のために生きる、それが、私たちの喜びとなります。苦しみの中でも、私たちを支える力となります。そこから賛美が生まれ、賛美が救いをもたらすのです。

三、看守と家族の救い

そして、その賛美は、自分を救うだけでなく、他の人も救います。地震で目を覚ました看守は「牢のとびらがあいているので、囚人たちが逃げてしまったものと思い、剣を抜いて自殺しよう」としました（27節）。牢の看守にはローマ兵があたることが多く、ローマ兵は規律が厳しいことで有名でした。この看守も責任感の強い人で、囚人を逃してしまったと思い、剣を抜いて自害しようとしたのです。それを見たパウロは大声で、「自害してはいけません。私たちはみなここにいる」と叫びました（28節）。看守はその声を聞いて、剣を手から離し、パウロとシラスのところに飛んでいきました。そして、ふたりに言いました。「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」（30節）

答は皆さんがよくご存知のように「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（31節）です。なんと明快な答でしょう。さまざまな宗教や哲学も救いについて語り、論じますが、結局のところ、答を持っていません。「あなたがそれが救いだと思えば、それが救いである。自分で救いだと思うものを選んで、救われたと思い込めばよい」ということしか語っていません。しかし、聖書は違います。「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」（ローマ 10:9-10）、「しかし、主の名を呼ぶ者はみな救われる」（ヨエル 2:32、使徒 2:21、ローマ 10:13）と教えています。「イエスを信じる」、このただ一つのことを人が救う

ことを、はっきりと語っています。

使徒 16:31 の御言葉が素晴らしいのは、「あなたは救われる」だけでなく、「あなたの家族も救われる」とあるからです。これは、家族のだれかひとりがイエスを信じれば、全員が自動的に救われるという意味ではありません。一人ひとりが救いの言葉を聞き、イエスを信じなければならぬのです。しかし、家族の誰も信仰を持っていなければ、その家に福音が伝えられるのは難しいことです。しかし、誰かひとりが救われたなら、それによって、その家族に救いの言葉が伝えられて、「あなたもあなたの家族も救われます」という言葉が成就するのです。この看守の場合、32 節に「そして、彼とその家の者全部に主のことばを語った」とあるように、救いのメッセージは、看守と看守の家族、また、その家に雇われていた召使いも含めて、その一家に語られました。そして、その全員が信じて、バプテスマを受けました。

33 節に「看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、その打ち傷を洗った。そして、そのあとですぐ、彼とその家の者全部がバプテスマを受けた」とあります。この情景を思い描いてください。看守は、パウロとシラスの手当をするために、清潔な水をたくさん汲んできました。看守は、その水で、ふたりの背中の傷を洗いましたが、同じ水で、パウロとシラスは、看守とその一家一人ひとりの罪とその傷を洗い、彼らに霊的な癒やしを与えました。看守は愛の心でパウロとシラスに水を注ぎ、パウロとシラスは父と子と聖霊の御名によって、権威をもって、看守とその一家にバプテスマの水を注ぎました。そしてその水は罪の赦しと救いをもたらすものとなったのです。

ピリピの町の看守は、自害しようとしたところを、パウロとシ

ラスによって救われました。もし、看守が自害してしまつたら、家族はたちまち露頭に迷つたでしょう。そうでなくても、囚人を逃してしまつた責任を問われ、大変なことになつたでしょう。家長である看守の救いが家族の救いになつたというのは、誰もが分かると思います。しかし、聖書がいう「救い」はそうした社会的な救い以上のものです。34 節に「それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろつて神を信じたことを心から喜んだ」とあるように、それは、まことの神に立ち返ること、罪からの救いでした。この救いの喜びが、看守の家族に満ちあふれたのです。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」という「救い」は、イエスを信じることによる、人の霊とたましいとからだの救いです。そして、この救いは、この時から、21 世紀の今日まで、世界中で成就し、実現しています。「信じるなら救われる。あなただけでなく、あなたの家族も、周りの人々も！」というのは本当なのです。

「あなたもあなたの家族も救われます。」皆さんも、この言葉が真実であることを体験してきたことでしょうか。私もいろいろなケースを見てきました。ある人が、「私の家にはだれもクリスチャンがいません。私ひとりがクリスチャンになったら、家族がうまくいかなくなるのが心配です」と言って、信仰を持つのを躊躇していました。けれども、その人は、この御言葉を読んで、「ああ、そうか、家族みんながクリスチャンになれば何の問題もないのだ」と分かつて、信仰を持ちました。また、長年夫の救いのために祈ってきた姉妹の祈りが答えられ、そのバプテスマができたときは、本当に感謝でした。日本でのことですが、家族がみんなクリスチャンになっていくので、父親がヤケを起こし、包丁

を振り回して暴れまわったことがありました。しかし、この人も、家族で最後になりましたが、イエスを信じ、バプテスマを受けました。これは、家族のみんなが、「あなたもあなたの家族も救われます」との言葉を信じて、あきらめずに祈り続けた結果でした。主の御言葉は真実です。祈りに答えてくださる神も真実です。

誰かが一人、イエスを信じて救われるなら、その救いは、その人一人に留まっていることはありません。その人の家族に、親族に、友人に、その町に、その国に、そして世界に広がって行きます。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」との御言葉を信じて、まだ救われていない家族、親族、友人、また、周りの人々のために祈り続けていきましょう。

(祈り)

「あなたもあなたの家族も救われます。」主なる神さま、あなたの恵み深いこの言葉を感謝します。主イエスへの信仰が人を救い、家族を救い、世界を救います。この信仰に堅く立ち、人々の救いのため祈り続ける私たちとしてください。主イエスのお名前です。

まことの神 使徒 17:22-27

17:22 そこでパウロは、アレオパゴスの真中に立って言った。「アテネの人たち。あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。

17:23 私が道を通りながら、あなたがたの拝むものをよく見ているうちに、『知られない神に。』と刻まれた祭壇があるのを見つけました。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう。

17:24 この世界とその中にあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。

17:25 また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とお与えになった方だからです。

17:26 神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とお定めになりました。

17:27 これは、神を求めさせるためであって、もし探り求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。

一、知られない神

皆さんは「アテネ」と聞くと、何を連想しますか。「オリンピック発祥の地」でしょうか。れとともに、アテネは、プラトンやアリストテレスといった哲学者を生んだ哲学の都、学問の町として知られています。プラトンが建てた学園「アカデメイア」から「アカデミー」という英語ができました。そんなわけで、アテネの町の人

私たちは好奇心が旺盛で議論好きでした。使徒 17:21 に「アテネ人も、そこに住む外国人もみな、何か耳新しいことを話したり、聞いたりすることだけで、日を過ごしていた」とある通りです。現代の私たちも、本当に大切なことを忘れ、目新しいだけのものに心を奪われ、そのことに時間やお金を費やして人生を無駄に過ごしていないかという反省が必要かと思います。

パウロがアテネに来たのは、この町で伝道するためではなく、迫害のためシラスとテモテと別れ別れになったので、そこでふたりを待つためでした。しかし、アテネの町が偶像に満ちているのを見て、パウロの心は痛みました。アテネにはわずかの間しか滞在しませんでした。が、まことを神を知らせたいという思いから、パウロは、町に出て伝道を始めました。

パウロの話聞いた人々は、彼を「アレオパゴス」に連れていきました。そこは公開の討論会場でした。パウロは、アレオパゴスに立って、こう語り出しました。「アテネの人たち。あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。私が道を通りながら、あなたがたの拝むものをよく見ているうちに、『知られない神に。』と刻まれた祭壇があるのを見つけました。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう。」（22-23 節）パウロは、誰もが興味を持つようなことから話を始めました。

アテネの町には、数多くの神々への祭壇が築かれていたのですが、その中に「知られない神」のための祭壇も

ありました。アテネの人たちは、自分たちが知っている限りの神々への祭壇を作って、それらを祀っていたのですが、「もしかしたら、自分たちの知らない神がいるかもしれない」と考えて、「知られない神に」という祭壇まで作ったのです。アテネの人の中にも、そうした祭壇があることを知らない人もいたでしょう。「知られない神に」という珍しい祭壇の話聞いて、人々は興味をひかれ、パウロの話に耳を傾けました。パウロは、このことから始めて、「自分たちは何でも知っている」と自負していたギリシャ人に、「じつは、あなたがたにも知らないことがあるのです。あなたがたの知らない神を教えましょう」と言って、まことの神について語り出しました。

現代の私たちは、古代の人々に比べれば、はるかに多くのことを知っています。ローマ時代の船といえば、奴隷たちが船底で櫂を漕いで進むものでした。それが、現代では月まで行くことができる船、宇宙船を作る技術を持つようになりました。ところが、私たちは「人は、なぜ、何のために生きるのか。どのように生きるべきか」を知らないでいます。「我々はどこから来たのか。我々は何者か。我々はどこへ行くのか」という、誰もが探求している問いへの答を持っていないのです。その答を知るには、人を造り、人を生かしておられる神を知らなければならぬのですが、そのまことの神を知らないでいます。ここに人間の不幸の原因があるのです。皆さんは、神を知っているでしょうか。それとも、皆さんに

とって、神は、依然として「知られない神」のままでしょうか。

二、聖書の神

そして、パウロは、神がどのようなお方であることを語り出しました。「この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。また、何かにも不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになった方だからです。」（24-25節）ここで言われていることは、聖書、とくに創世記にある通りのことです。創世記は「初めに、神が天と地を創造した」（創世記 1:1）、「神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった」（創世記 2:7）と教えています。人が「土地のちり」から作られたというのは本当です。人の身体を構成している元素のすべては土にあり、人は死ねば土に戻ります。しかし、人は身体だけでできてはいません。人には魂があり霊があります。神が吹き込まれた「いのちの息」は、人の生物学的な命だけでなく、知性や感情や意志の場である魂、そして神と交わることのできる霊をも指しています。神は人にエデンの園を与え、そこにある豊かなもので人を養いました。パウロは、アレオパゴスではエピメニューデスやアラートスといったギリシャの著作からも引用して語りましたが、彼が語ったすべてのことは、聖書に基づいていま

す。神は、ご自身を聖書の中に表しておられるのです。ですから、神を知るには何よりも聖書を読み、学ぶことが必要なのです。

パウロは、続いて、こう言いました。「神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とお定めになりました。」（26節）これは、神が人類と共にいてその歴史を導いておられることを言っています。神は、「創造の神」ですが、同時に、ご自分が創造されたもの、とりわけ、人を導かれる「摂理の神」でもあるのです。「摂理」は英語で “Providence” と言います。“Pro”（前もって）と “video”（見る）という言葉から来ています。神が、人々の必要を前もって見て、備えてくださるといことです。聖書のさまざまなストーリーは、神が、「摂理の神」であることを教えています。それは創世記にあるヨセフの物語に見ることができます。ヤコブの子ヨセフは兄弟たちによってエジプトに奴隷として売られ、牢獄にまで落とされるのですが、そこから、エジプトの王に次ぐ位まで上りました。それで、その地方を襲った七年間の大飢饉の時、ヤコブの一族をエジプトに迎え、彼らを養いました。聖書は、ヨセフについて「主が彼とともにおられた」（創世記 39:3、23）と言っていますが、神は見事にヨセフを導き、ご自分の民を守り、歴史を方向づけておられます。

このように、神が人を特別なものとして創造し、常に人を心にかけておられるのに、人が神への礼拝を捨て

て、金や銀、また石などを刻んでそれにひれ伏すのは、神に対して正しくないばかりか、人間を卑しめることにもなるのです。パウロは、ローマ人への手紙の中で、偶像礼拝について、こう書きました。「彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたち に似た物と代えてしまいました。それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。」（ローマ 1:22-25）同じことを、アテネの人々にはこう言いました。「そのように私たちは神の子孫ですから、神を、人間の技術や工夫で造った金や銀や石などの像と同じものと考えてはいけません。神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。」パウロは、神を知らないことと、そこから生まれる偶像崇拜を、決して小さなこととは見ていません。それは、人が第一に悔い改めなければならないことなのです。神を知ろうとせず、神を信じようとしないでいることは、大きな過ちです。そこからさまざまな不道德や犯罪が生まれます。それは、最大の不幸です。しかし、神を知るなら、私たちは自分がどこから来て、どこへ行くのか、自分が何者であり、何のために、どのように生き

るべきかを、はっきりと知ることができるのです。

三、イエス・キリストの神

パウロは続いてこう言いました。「なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの実証をすべての人にお与えになったのです。」

(31 節) イエス・キリストについて語ろうとしました。ところが、人々はパウロが復活に触れると、あざ笑い、「このことについては、またいつか聞くことにしよう」と言って、パウロの話を中断してしまいました(32-33 節)。

しかし、パウロに「つき従って信仰にはいった人たち」が幾人かいました。そのうちの一人は、なんと、アレオパゴスでの討論を聞いてそれを判定する「裁判官」でした。彼は、イエス・キリストについてパウロから詳しく聞き、イエス・キリストを信じる者となりました。

「神が人となる」、「神の御子が十字架で死ぬ」、「死者が復活する」といったことは、ギリシャの哲学とは全く相容れないものでした。それなのにアレオパゴスの審判官がイエス・キリストを信じたのは驚くべきことでした。この人が、まことの神を知り、イエス・キリストを信じることができたのは、自分の知識を発展させたからではなく、人間の知識の限界を認め、神に対して悔い改めたからでした。神を知る最良の方法は、神の前にへりくだることです。「理解する」は “understand” と言いま

す。神の下に身を置いてはじめて、私たちは神を知ることができるのです。

アテネの人々は、パウロの話を知的エンターテインメントとして聞こうとしましたが、パウロはイエス・キリストを語ろうとしました。イエス・キリストによらないでは、まことの神を知ることができないからです。イエス・キリストを信じることがなければ、その人にとっての神は、生きたお方ではなく、理論上の神でしかありません。哲学の上での「神」は世界の存在や秩序を説明するために使われる「第一原因」でしかないのです。そのような神は、偶像と同じように、何の救いももたらしません。生きておられる、まことの神、イエス・キリストの神だけが、私たちに確かなものを与え、生かし、導いてくださるのです。

パスカルは、こんな言葉を遺しました。

アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神。

哲学者および識者の神ならず。

确实、确实、感情、歓喜、平和。

イエス・キリストの神。

〈わが神、すなわち汝らの神〉

汝の神はわが神とならん。

パスカルは神を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と呼びました。聖書にある通り、アブラハム、イサク、ヤコブと共にいて、彼らにご自身を現し、その人生を導いてくださった生ける神を、彼は信じたのです。

「生ける神」とは、人と共に生きてくださる神、人を生

かす神です。パスカルは天才的な数学者であり哲学者でしたが、「神は哲学者や識者の神ではない」と言いました。人が神を知り、神を確信できるのは、知識の積み重ねや、天才的なひらめきによるのではない、イエス・キリストを信じる信仰によってだと言っています。神はイエス・キリストの神です。人となってくださった神、イエス・キリストだけが、人に神を知らせ、神と人とを結びつけてくださるのです。

神は、決して「知られない神」ではありません。聖書によって、イエス・キリストによって、ご自分を表しておられます。アテネの人々は「哲学の神」しか知りませんでした。しかし、その中からもまことの神を知り、信じる人が生まれました。私たちも、自分の知識に頼らず、信仰によって神を求め、神に頼り、従う者でありたいと思います。

(祈り)

イエス・キリストの父なる神さま。人をご自分に近い者として造り、人と共にいてくださることを感謝します。聖書のうちに、また、イエス・キリストへの信仰によって、まことの神であるあなたを見出し、また、あなたを証しすることができますよう、私たちを助け、導いてください。イエス・キリストのお名前です。

恐れなくて 使徒 18:9-11

18:9 ある夜、主は幻によってパウロに、「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。

18:10 わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから。」と言われた。

18:11 そこでパウロは、一年半ここに腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。

一、恐れの原因

コリントで伝道を始めたパウロに、キリストは「恐れるな」と語りかけました。聖書には「恐れるな」という言葉が何百回と出てきます。そのことは、私たちがどんなに多くの恐れを持ちながら生きているかを示しています。

まず、私たちは、自然の災害を恐れます。テキサスは2月に寒波に見舞われ、今また熱波に見舞われています。寒波の時には電気が止まり、暖房が使えなくなって凍える思いをした人が多くいました。この暑さで電気が止まって、冷房が使えなくなったら大変なことになり、命にかかわります。ハリケーンやトーンイド、地震や山火事などでも、命が危険にさらされます。そうしたものを恐れるのは当然のことで、恐れ的心によって自分の命を守ることができます。自然の災害に対しては早く避難して身を守ることが大切で、警報を無視して行動することは勇気あることではありません。私たちは、また、病気

や事故や怪我を恐れます。そうしたものに対する恐れもまた、自分の身を守り、命を守るのに役立ちます。しかし、恐れがあまりに強くなると、心から平安が消えていきます。

実際、新型コロナウイルスの感染が拡大して、生活に大きな変化が起こり、人々が「巣ごもり」状態に入ってから、心の病になる人が増えています。姿の見えない、ぼんやりとした恐れが、私たちの心を蝕んでいるのです。たいていの恐れは対象がはっきりしており、対象を特定できれば、それを解消する方法を見つけることができます。対象のはっきりしない恐れは、それを解決するのが難しいのです。恐れという感情は、本来、私たちの命やからだを守るためにあるのですが、恐れがコントロールできなくなって自分のからだを傷つけたり、命を絶ってしまうことがあります。

それに、社会があまりにも複雑になっていることも、恐れの原因の一つでしょう。SNSなどがなかった20年前には当たり前の人を信じてよかったのが、今では、何事でも疑ってかからなければならなくなり、個人情報盗まれ、悪用されはしないかという心配や恐れが先に立つ時代になりました。

また、私たちは、まだ起こっていないことを前もって心配し、恐れに囚われます。たとえば、会社で、これこれのところに行って、こういうプレゼンテーションをきなさいと言われた場合、「きちんと準備をしたから大丈夫」と自信をもって臨む人もあれば、「うまくいかな

かったらどうしよう」とびくびくしながらの人もいます。それは普段の生活でも同じです。「うまくいかなかったらどうしよう」と、絶えず恐れ、何事をするにも不安になる人も多いと思います。そして、その恐れや不安は、その人の能力とあまり関係がないようです。能力があつて、何をしても上手にできる人なら、物事を恐れなくできるかといえ、かならずしもそうではありません。私の知っているある人は、何をするにも不安そうにしていました。他の人が「素晴らしかったですよ」とほめても素直に喜ばないのです。どうしてだろうと不思議に思っていました、その人と話してみても分かったことは、「自分は能力のある人間だ。もっとよく出来なければいけない。こんなレベルで褒められてもしょうがない」という、強い誇りがあつて、周りから最高の評価を受けようとしていたのです。「自分は駄目だ」という思い込みも、「私ほど立派な人間はいない」という思い上がりも、結局は人を恐れに縛りつけることになるのです。

二、恐れへの解決

では、どうしたら、無用な恐れから解放されるのでしょうか。心理学者たちは、「恐れは自分が他の人にどう評価されるかをあまりにも気にすることから起こるのだから、自分にこだわらないようにすればよい」と言います。しかし、人は、「人の間」で生きています。他の人と関係なく、ひとりで生きてはいけません。「あなたはいなくていい人だ」と言われ、自分も「私は誰からも

必要とされていない」と思いこんだら、もう生きてはいけなくなります。人は、「私は必要とされている」ということが分かる時、人生の意義を見出し、自分の力を発揮して生きることができるからです。

そして、自分がかげがえのない存在であるということが分かるためには、私たち一人ひとりが神によって特別な者として造られていることを知る必要があるのです。私が信仰を持つようになったとき、最初に触れた聖書の言葉のひとつは、「それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです」（詩篇139:13）でした。私は、「自分はなんのために生まれてきたのだろう」という漠然とした疑問を心の奥深くに持っていました。少年時代に母親を亡くしたことによって私は自分が生まれたルーツをもぎとられたように感じました。しかし、この聖書の言葉に出会って、私は母から生まれただけではない、神によって造られた者で、自分のルーツが神にあることを知りました。人は生物学的に生まれてくるだけではない、神によって造られ、生かされているということを知りました。人は分類学では「動物界、脊索動物門、脊椎動物亜門、哺乳綱、真獣下綱、サル目、直鼻猿亜目、ヒト上科、ヒト科、ヒト亜科、ヒト族、ヒト亜族、ヒト属」に属するもので、「ホモ・サピエンス」種だと言われます。まるで落語の「寿限無」のようですが、人間は「ホモ・サピエンス」以上の者です。神によって神のかたちに造られた存在なのです。

ギリシャ語で「人」は「アンツローポス」と言い、これには「上を見上げる者」という意味があります。動物は地面を見ながら歩きますが、人間は直立して上を見上げて歩きます。神に造られた人間は、神を見上げ、神の祝福を受けて生きる存在なのです。私たちの安全も、私たちの価値も、すべて神にあります。神に生かされ、守られていることを知るとき、私たちは恐れから解放されます。神に愛されていることを知るとき、私たちは人の評価に一喜一憂する不安定な生活から、また、うぬぼれや高慢、自己卑下や自己憐憫から解放されるのです。

神は言われます。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。」（イザヤ 41:10）「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いて、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。」（イザヤ 43:1-2）私たちが愛し、恵みと力とに満ちたお方が、私たちにそう語りかけておられるのです。このお方を知り、このお方に信頼するとき、私たちは恐れに代えて平安を受けることができます。

イエスはこう言われました。「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」（マタイ 10:28）私

たちにとって恐れるべきお方は神だけです。ほんとうの意味で神を恐れるとき、私たちは、一切の不必要な恐れから解放されます。歴史に名を残した信仰者たちは皆、何者をも恐れず、信仰のために戦いました。16世紀にメアリー一世が英国女王になり、英国の宗教改革を覆し、プロテスタントを迫害しました。王室の牧師であったジョン・ノックスは彼女によって追放され、スイスやドイツに行きましたが、スコットランドに帰り、スコットランドの宗教改革に身を捧げました。歴史家たちは、ノックスについて「彼は神以外の何者も恐れなかった」と評価しています。

三、パウロの恐れ

パウロは、コリントに来たとき、恐れの中にありました。コリント第一 2:3 に「あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました」と書かれています。パウロはなぜ、何を「恐れおののいて」いたのでしょうか。

いくつかのことが考えられますが、ひとつは、ユダヤ人の迫害や伝道の妨害だったと思われます。パウロはどの町でも、何らかのトラブルがあって、短い期間にそこを去らなければなりませんでした。第二回目の伝道旅行では、ピリピの町で投獄され、そこを去りました。テサロニケでは、町のユダヤ人たちがならず者を集めて騒ぎを起こし、パウロがいたヤソンの家を襲いました。そこにパウロがいなかったため、ヤソンの一家がかわりに投獄されました。パウロはそこからベレヤに行くのです

が、テサロニケのユダヤ人たちがパウロの後を追いかけてそこでも騒ぎを起こしました。パウロ自身はユダヤ人から石で打たれても、ローマ兵のむちを受けてもそれに耐えることができました。しかし、パウロのために、他のクリスチャンが苦しめられるのを見るのは、本当につらいことでした。パウロが語ると多くの人々が信仰を持ちました。しかし、パウロは信仰を持った人たちに、さらに信仰の真理を教えて、彼らを強める、そのための時間がないままに、次のところに行かなければなりませんでした。コリントに来たとき、果たして、この町で落ち着いて伝道できるのだろうかという恐れを持っていたのです。

そんな彼にキリストは言われました。「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。」キリストは、このコリントの町では、ユダヤ人からの迫害や妨害、またその他の騒動からパウロを守ると約束してくださったのです。実際、コリントのユダヤ人も頑固でキリストを信じようとはしませんでした。会堂司が一家をあげてキリストを信じバプテスマを受けるなど、信仰を持つユダヤ人もいました。一年半の後、パウロがユダヤ人によって地方総督に訴えられるという事件が起こるまでの長い間、パウロはコリントの町に腰を据えて神のことばを教えることができたのです。

第二に、パウロは、コリントに来たとき、孤独の恐れがありました。パウロは今まで、ずっと、シラスやテモ

テ、また、他の人々と一緒に伝道してきました。祈りあい、助け合い、励ましあって、チーム・ワークの中で働いてきたのです。ところが、アテネで落ち合うはずのシラスとテモテと会うことができず、パウロはたったひとりでコリントにやって来ました。コリントはギリシャ有数の商業都市で、人口の多い大都会でした。「孤独は山になく街にある」と言うように、パウロは、この大きな街に来て、より一層孤独を感じたのかもしれませんが。もちろん、パウロは神が共にいてくださることを信じ、また体験していました。しかし、パウロには同じ信仰と使命を持つ人々が必要でした。パウロは信仰の英雄でしたが、他の人との交わりや他の人の祈りや助けを必要としないような「孤高の人」ではありませんでした。彼ほど他の人とのつながりを大切にし、「私のために祈ってください」と言って、他の人に頼った人はありません。キリストを信じる信仰は、この世からかけ離れたものではなく、この世に生きる人々の中で働くものです。信仰がコミュニティの中に広がっていくためには、信仰者のコミュニティがどうしても必要なのです。

キリストはパウロに「恐れなくて、語り続けなさい。…この町には、わたしの民がたくさんいるから」と励ましてくださいました。「この町には、わたしの民がたくさんいる。」この言葉の通り、パウロは、コリントの町に入ると、すぐにアクラとプリスキラ夫妻に会いました。二人はローマにいたのですが、最近、そこからコリントにやってきたばかりでした。神が彼らをパウロに出

会わせるため、またパウロが二人に出会うために両者をコリントに導かれたのでした。そのうち、シラスとテモテもやってきて、コリントで次々と人々が信仰に入り、信仰のコミュニティ、教会ができあがっていきました。神は、信じる者が共に神に近づき、神の恵みを得るために、教会というコミュニティを備えてくださったのです。この教会というコミュニティが私たちを取り囲むコミュニティに福音を伝えていくのです。

日本人クリスチャンはあまり多くありません。クリスチャンであっても、そのことを言い表さない人もいます。それで、この町のどこに、キリストを信じる人々がいるのだろうか？ 果たして、どれだけの人が神の言葉に耳を傾けるのだろうか？ と思ってしまうこともあります。しかし、キリストは、「恐れるな」と語りかけ、励ましてください。その励ましによって、神の言葉を語り続けていきたいと思えます。神の言葉をもって、神の民を呼び集めたいと思えます。

(祈り)

イエス・キリストの父なる神さま。私たちは、さまざまなこと落胆したり、混乱したり、むやみに恐れたりしやすい者です。そんな時、もう一度、あなたが私たちを愛し、守り、力づけてくださることを、御言葉によって確認し、その約束を信じて立ち上がり、前進できるよう、私たちを力づけてください。イエス・キリストのお名前です。

使徒たちの伝えたもの

使徒 20:17-21

20:17 パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。

20:18 彼らが集まって来たとき、パウロはこう言った。「皆さんは、私がアジアに足を踏み入れた最初の日から、私がいつもどんなふうにあなたがたと過ごして来たか、よくご存じです。

20:19 私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。

20:20 益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、

20:21 ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。

パウロは、2回目の伝道旅行でエーゲ海を渡ってマケドニアとアカヤ（今日のギリシヤ）に入り、ピリピ、テサロニケ、コリントで伝道しました。第3回目の伝道旅行では、2回目の伝道旅行で行けなかったアジア（今日のトルコ）に入り、エペソに留まって伝道しました。こうしてエーゲ海の両岸に伝道がなされたので、パウロはそこからローマ帝国の西の果て、イスパニヤ（今日のスペイン）にまで足を伸ばす計画を立てました。しかし、その前に、パウロにはエルサレム教会への義援金を届ける務めがありました。エペソをあわただしく発ったので、パウロはエルサレムに向かう途中、ミレトの港にエペソの教会の指導者たちを呼んで、別れの言葉を告げました。それがきょうの箇所です。

パウロにも、他の人々にも、エルサレムで大きな苦難

がパウロを待っていることが知らされていまして、パウロは、もう二度とエペソの人々に会えなくなることを覚悟していました。それで、この時の別れの言葉はパウロは、まるで遺言のようでした。ですから、私たちも心して、その言葉に聞きたいと思います。

一、悔い改めと信仰（21 節）

パウロは、ここで、自分が去っても、自分が教えてきたことを守るようと言っています。では、パウロは何を教えてきたのでしょうか。それはまず、「神に対する悔い改め」と、「主イエスに対する信仰」でした（21 節）。

「悔い改め」と「信仰」は、イエスご自身が語り、教えたことです。イエスの宣教の第一声は、「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」でした（マルコ 1:15）。そして、イエスは天に帰るとき、「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」（ルカ 24:46-47）と言われました。

使徒たちは、こうしたイエスの言葉に基づいて、人々に悔い改めを語ったのです。ペテロのペンテコステの日の説教でも、こう言われています。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」（使徒

2:38) ペテロは、悔い改めてバプテスマを受けるよう言っていますが、このバプテスマは、イエス・キリストを信じ、信じたことを形に表すことを言っています。「悔い改め」と「信仰」はコインの両面のように一体です。悔い改めのない信仰はありませんし、信仰のない悔い改めもありません。

この「悔い改めと信仰」はまず、ユダヤの人々に呼びかけられました。そして、悔い改めが、「エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」とあるように、今は、全世界のあらゆる人々に「悔い改めと信仰」が呼びかけられているのです。異邦人であるコルネリオがイエス・キリストを信じてバプテスマを受けたことを聞いた人々は、「神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになった」と言って、神をほめたたえています（使徒 11:18）。今日の箇所には「ユダヤ人にもギリシヤ人にも…」（21 節）とあるように、パウロもすべての人に悔い改めと信仰を教えました。パウロは使徒 26:20 で、「ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行ないをするようにと宣べ伝えて来たのです」と言っています。

「悔改めよ」などと言われると、多くの人には「罪を白状しろ」と脅かされているように感じるかもしれませんが。しかし、聖書が言う悔い改めはそのようなものではありません。イエスは、悔い改めは喜びだと言われまし

た。ルカ 15 章に、「ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にある」、「ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こる」、「いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか」（ルカ 15:7, 10, 32）とあります。それは、私たちに罪の赦しを与え、聖霊を与えてくれるからです。「いのちに至る悔い改め」という言葉のとおり、罪の中に死んでいる者を生かし、そこから立ち上がらせ、神のもとへと歩ませてくれるもの、それが悔い改めです。テサロニケ第一 1:9 に「あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり…」という言葉がありますが、悔い改めるとは、「立ち返る」ことです。「死んだ偶像から…生けるまことの神に…立ち返る」のです。いのちのないものをいくら崇めても、そこから何も得られません。生きておられる神に立ち返るとき、神は、イエス・キリストによって永遠のいのちを与え、そのいのちで、私たちを生かしてくださるのです。「生けるまことの神に立ち返って、イエス・キリストを信じる。そして、いのちにあふれた歩みをする。」これがパウロが語り、教えてきたことでした。皆さんは、その悔い改めの恵みに招かれ、それにあずかったのです。これにまさる喜び、幸いはこの世にありません。

二、神のご計画の全体（27 節）

次にパウロは、「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいた」（27 節）と言

い、神の救いの計画の全体をしっかりと守っていなさいと教えています。

私は学生時代、幾人かの牧師先生がたに、「聖書をどのように学ばいいですか。そのために、どんな参考書を勧めてくださいますか」と尋ねてまわったことがあります。私は、多くの先生がたから、「聖書を真理の体系として学びなさい。そのためにはジョン・カルヴィンの“*Institutes of the Christian Religion*”（キリスト教綱要）を読みなさい」というアドバイスをいただきました。私はそのアドバイスに従いましたが、それは、その後の、私の聖書や神学の学びに大いに役立ちました。とくに、聖書が、さまざまな書物のコレクションでありながら、そこには、中心的なものから周辺的なものへ、また、骨格と肉付け、神のみわざと人間の側からの応答といった体系があることを知ったことは、とても幸いなことでした。

聖書はどこを開いても心の糧となり、生活の知恵となり、人生の導きとなります。聖書をそのように読んで、間違いではありません。しかし、それだけで終わらずに、聖書が神について、世界について、人間について、救いについて、救われた者たちの歩みについて体系的に教えていることを知ることはとても大切なことなのです。

パウロは、第3回目の伝道旅行では、ほとんどの年月をエペソで過ごしました。自分が各地に出かけるのではなく、アジア各地の教会の指導者たちがパウロのところに

来て、パウロから学び、それを自分たちの町に持ち帰って福音を語るという伝道方法をとりました。パウロは「ツラノの講堂」（使徒 19:9）で毎日弟子たちを教えました。そこは、神学校のようなところになったのです。そして、パウロがそこで教えたのは、伝道の方策や説教の仕方といったものではなく、聖書に明らかにされた神の救いのご計画の全体だったのです。

パウロが、エペソで教えた「神の救いのご計画の全体」、それは具体的にはどういったものだったのでしょうか。それを知るには、パウロが書いた二つの手紙を学ぶとよいでしょう。その一つは、「ローマ人への手紙」です。ローマ人への手紙は、パウロがエペソを離れ、コリントに行き、そこで冬を過ごした間に書かれました。エペソを離れてすぐに書かれていますので、その手紙には、パウロがエペソで教えてきた「神の救いの計画の全体」の要約が見事に書かれています。

もう一つは「エペソ人への手紙」です。この手紙は、パウロがローマに着いてから書いたものと思われませんが、ここにも、パウロがエペソで教えたであろう、「神の救いの計画の全体」が書かれています。パウロは、かつてエペソで教えたことを、その手紙によって思い起こさせようとしたのです。聖書はすべて神の言葉であって、いらぬ部分などないのですが、パウロが言う、神の救いの計画の全体を学びたいと思うなら、このふたつの手紙は決して外すことができません。皆さんに、この二つの手紙をしっかりと学ぶことをお勧めします。

三、恵みのみことば（32節）

さて、パウロはエペソの教会の指導者たちへの別れの言葉を、次のように締めくくりました。「いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を継がせることができるのです。」（32節）パウロは、もうすぐ船に乗ってエルサレムに向かおうとしています。たとえ、エルサレムで無事だったとしても、彼はすでにローマからイスパニヤに向う計画を立てていましたから、もうアジアに戻ることはないでしょう。けれども、パウロは、自分が去っても、アジアの教会が守られることを信じていました。パウロは去っても、パウロが教えた神のことばが、人々の内に留まっているかぎり、その人々は守られるからです。

神のことばはここで、「恵みのみことば」と呼ばれています。それは、神の恵みから生まれたもの、神の恵みを教えるものだからですが、それだけではなく、神のことばは、私たちに神の恵みを与えるものだからです。神のことばは特別です。それは、私たちに神についての知識やキリストについての情報を与えるだけでなく、神の恵みを実際にもたらしてくれるものなのです。神の子どもたちは、神の言葉によって生まれ、神の言葉によって成長します。ペテロ第一 1:23、2:2 に、「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神

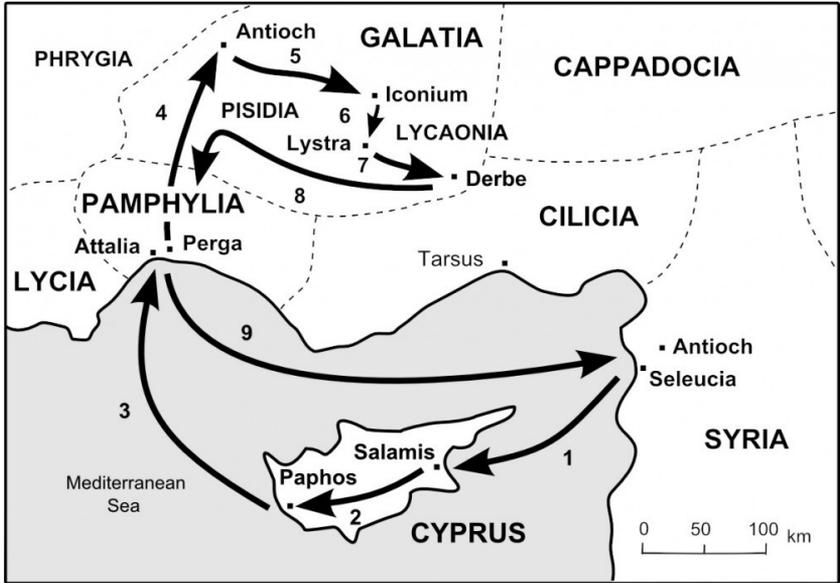
のことばによるのです」、「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです」とあるとおりです。使徒 20:32 にも「みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を継がせることができる」と言われています。神が人を救い、キリストがその救いを成し遂げ、聖霊がそこに私たちを導いてくださるのですが、同時に、神のことばが救いの恵みを届けるのです。

パウロもペテロも、マタイも、ヨハネも、他の使徒たちも皆、二千年前に世を去りました。しかし、使徒たちや使徒たちに仕えたルカやマルコたちが書いた聖書は今も残っています。この聖書を、神のことばと信じて、それに信頼するとき、私たちはいのちを受けます。神のことばによって守られ、育てられます。自分の使命を知り、それを果たす力を受けます。神のことばが信じる者たちを生み、育て、守り、力づけるのです。そして、神のことばによって強められた信仰者たちが、今度は神のことばを広めていきます。神のことばによって教会が生まれ、教会が神のことばを広めます。ですから、「使徒の働き」では、教会が建てられることと、御言葉が広まっていくこととが、同じ出来事として描かれています。たとえば、使徒 16:5 では、「こうして諸教会は、その信仰を強められ、日ごとに人数を増して行った」とありますが、使徒 19:20 では、「こうして、主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った」とありま

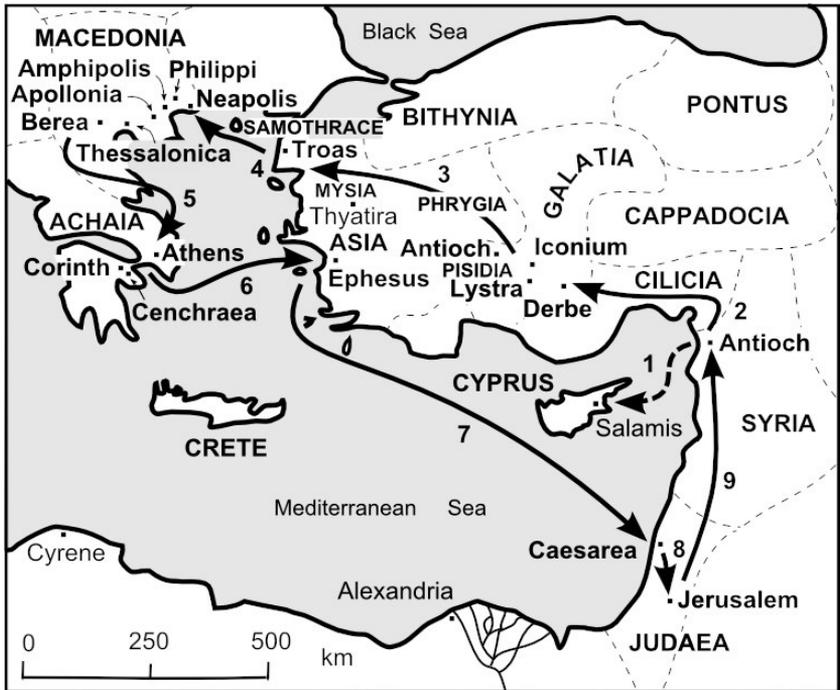
す。私たちは神のことばを証ししたいと願っています。教会として、それを広めたいと努力しています。どうしたらいいのだろうかと思ひ、あせります。しかし、神のことばを広める力が、神のことばから来ることを覚えていましょう。神のことばそのものに力があって、私たちを通して広まっていくのです。私たちも、パウロが言ったように、自分自身を「神と恵みのみことば」にゆだねましょう。その時、主のことばが広まり、ますます力強くなって行きます。そのことをこの目で見て、体験して、神を崇めたいと思います。

(祈り)

主なる神さま、あなたは力ある御言葉によって世界を創造し、それを保っておられます。その御言葉によって、信じる者を新しく生まれ変わらせ、育て、守ってください。私たちが御言葉の恵みを常に受けることができるため、さらに御言葉を慕い求め、御言葉に頼る者としてください。イエス・キリストの御名で祈ります。



パウロの第1次伝道旅行



パウロの第2次伝道旅行

「神」という漢字は「示」と「申」から成り立っています。これは、漢字文化圏においても、「神とは、人知を超えた事柄を示す者である」という概念があることを物語っています。聖書もまた、神は、その愛のゆえに、ご自分を人間に啓示されるお方であると教えています。

「啓示する」は、英語で “reveal” と言いますが、これには「ベールを取り除く」という意味があります。彫刻などの芸術作品が、一般に公開されるまでの間、布で覆われて隠されていますが、いよいよそれが発表される時には「除幕」と言って、その覆いを取り除きます。神はそのようにして、今まで人の目に隠されていたものを明らかにしてくださるのです。

また「胸襟をひらく」という言葉があるように、神は私たちに客観的な真理だけでなく、ご自分の胸のうちをひらいて見せてくださいます。英語で「心臓」が「心」のある場所として描かれるように、ヘブライ語では「はらわた」（内臓）が感情の座として描かれます。それで神は、「エフライムは、わたしの大切な子、喜びの子なのか。わたしは彼を責めるたびに、ますます彼のことを思い起こすようになる。それゆえ、わたしのはらわたは彼のためにわななき、わたしは彼をあわれまずにはいられない」（エレミヤ書 31:20）と言って、イスラエルへの愛を表しておられます。

聖書のこうした箇所を語ることによって、日本人にもその愛のゆえに、ご自分を表さずにはおれない神を示すことができるようになると思います。



Penguin Club

www.penguinclub.net